7．Radioisotopeを用いた各種血漿cortisol測定法による血漿cortisol値の比較

細木　秀美　森　正彦　次田　治子
橋本　浩三　高原　二郎　大藤　真
（岡山大・3内）

近年，radiostereoassay ならびに radioimmunoassay の進歩により，血漿 cortisol 測定法は著しい進歩を呈した．今回，我々は ^{3}H-corticosterone を用いた radiostereoassay，^{75}Se-cortisol を用いた radiostereoassay および ^{125}I-cortisol を用いた radioimmunoassay を用いて血漿 cortisol を測定し，測定値間の相関，ならびに各々の測定法の有用性につき検討を加えたので報告する．

三者での測定値は互いに，ほぼ良好な相関を示したが，cortisol 低値の部分で標準曲線の特性より，^{75}Se-cortisol を用いた radiostereoassay による測定値がやや高値を示す傾向がみられた．Binding protein として radiostereoassay は corticosteroid binding grobulin を，また，radioimmunoassay は抗血清を用いているが，その特徴より，感度，特異性ともに抗血清が一段とすぐれており，また，測定操作の簡便性より radioimmunoassay が，今後，広く普及するものと推定される．

8．肝癌のRI診断

浜本　研
（愛媛大・放）

原発性肝癌，転移性肝癌患者で ^{67}Ga-citrate および ^{99m}Tc-colloid による肝シンチグラフィーを行い，同時に患者血清中の CEA および AFP を測定してこれら諸検査の組み合わせによる診断の意義を検討した．

CEA は石川らの開発した2抗体法で，AFP はダイナボット社製 RIA キットにより測定した．Hepatoma では AFP 値は37例中28例（76%）で高値を，転移性肝癌では39例中1例のみが高値を示した．CEA は Hepatoma で66%の陽性率であったが，ほとんど 60ng/ml 以下であった．^{67}Ga-citrate シンチグラフィーで Hepatoma では76%が高摂取を示したが，転移性肝癌，Cholangioma では低摂取を示した．Hepatoma で高摂取のものは AFP 陰性例が多く，低摂取のものはおおむね AFP 高値で，両者の組み合わせで Hepatoma の診断率は97.5%となった．AFP 正常で CEA 高値を示す Hepatoma は ^{67}Ga 高摂取を示すので転移性肝癌との鑑別が可能であり，これら諸検査の組み行わせにより原発性肝癌と転移性肝癌の診断および鑑別が可能であると考えられた．

9．^{99m}Tcスズコロイドの肝シンチグラフィーによる脾の異常陰影と血管像

森崎　緑朗　石川　宏輔
（鳥取県立厚生病院・放）
湯川　喜美　蓮尾　春輝
（鳥取県立厚生病院・内）

細網肉腫3例，Bonti 氏症候群2例，高ビリルビン血症があって脾の位置異常を伴った1例の計6例について肝 Scintigram 上の脾異常陰影と血管造影所見とを検討した結果では，血管像でBanti型では脾内動脈のstretching, displacementが見られるも一様な分岐と末梢への内腔の急激な狭少化があり末梢まで造影されていなかったが，細網肉腫では stretching, displacement の外に encasement を伴った明らかに不規則な分岐がみられ末梢へは緩徐な内腔狭少化を呈し末梢までの追跡が可能であった．一方，Scintigram 上の脾影は，前者では脾内 RI 集積は均等で，後者では欠損，粗造菲薄影を呈していた．肝 Scintigram 上の脾影の注意深い読影と合わせて血管造影を行う事により脾疾患の診断価値が一層高められると考える．

10．^{99m}Tc-pyrophosphate骨シンチグラフィーによる骨肉腫の肺転移巣診断の試み

平木　祥夫　玉井　豊理　水川帰一郎
田辺　正忠　山本　道夫
（岡山大・放）

肺転移巣を有する骨肉腫患者（2症例）に計4

Presented by Medical*Online